

蘇芳集

静

養

高橋

さえ子

盆市の夕影の濃き苧殻束
磯松に夕日が残る送り盆
この国の色なき風の松の色
静養のまどろみのなか送り盆
庭園の更けて秋夜にはたづみ
秋風の中や降圧剤二錠
日蓮の入滅の地や梅探る

百花園では

青山

丈

百花園では食べてゆく心太
草いきれ出来たからもう帰らうか
雨の日のででむしを置く掌を濡らす
七夕とだけ日記には書いておく
紫陽花を見てゐない日の日暮かな
千住から草加辺りの晩夏かな
白粉花の前にいつもの水溜り



夏の月

下平直子

投函の序でを歩く夏の月
月涼し鉛筆の香に夜を更かし
存分にけふの汗してけふの糧
雨あとの紺つやつやと太り茄子
湯殿より夫の音くる端居かな
涼しさや庭石打てる雨光り
擦れちがふ人もハミング青田風

紫陽花

富田正吉

今年また同じ茅の輪をくぐるなり
菩提寺の松にゆきつく蝸牛
雨脚のいきいき見ゆる男梅雨
枇杷の実をりんりと食ふ誕生日
時の日の樹下に雀の照り翳り
明易や夢のかたちになりし母
紫陽花や眠くなつても人に会ふ

鴉の日

野路斉子

すぐ其処にある町遠しちちる虫
草の花足るべく咲きぬ辛うじて
夜長さの町を守る灯信号機
知らなかつた九月六日は「鴉の日」
二十四時間テレビ昼蟬夜の蟬
夕立の心掴めずすぐ晴れて
その昔花野でありし日照り雨

息ただし

前田陶代子

人ごゑのあをみて七月の水辺
万緑を来て一水に息ただし
池形に草の勢へる半夏生
日時計の針のまつくろ巴里祭
雨を呼ぶ風となりける凌霄花
額を打たれて麦秋の雨のつぶ
庭草のひといろに梅雨深むなり

巴里祭

宮尾直美

花蜜柑海の風来て子が馳けて
裏町を水の音ゆく濃紫陽花
七月の海の青さの砂時計
山川の山より暮れて半夏生
いつしかに祖父似の甥の白餅
木綿着て夏を働く夏嫌ひ
トーストにバターたつぷり巴里祭

河童忌

八木下末黒

あぢさゝると打たれて居たり男傘
梅雨深し草木いかに極楽寺
飛び交はし捕食しきりに雨燕
ほんのりと雨に色置く夏薊
物置の焙烙さがす盆用意
火の玉の落ちて線香火花かな
河童忌やマスクの顔の熱くなる

白餅

吉田幸敏

初蟬のまづは等身大の声
炎帝に仕ふ歟胼胝をまたふやし
瑠璃揚羽我が直観に天降るもの
晩節や玉の緒ひたと白餅
この町も地麦酒も褒め旅を継ぐ
学会の旅の終はりの巴里祭
緑蔭に椅子出す移動祝祭日

昼顔

小川美知子

昼顔の忘れてゐると咲いてゐる
夕かけて豪雨の予報冷やし茄子
この頃はわりあひ元氣夏薊
雪渓を遠見にたたむエコバッグ
水の香や初蟬のゐる大きな木
晩涼や待ち草臥れて待つてをり
スカートに隠しポケット夏終はる